「できない英語教師の歩み」

Ｔ高校　山下　清美

１　『英語にとって「教師」とは何か』を読んで

久しぶりに寺島先生の「教師」とは何かを読んで、もう何回も読んでいるのに、前回とは違った部分にマーカーを付けている自分がいた。また、読み直して、色々な本をまた読まなければいけないと思うことと、一番印象に残った、以下の文章を引用する。

１．１　引用

そこで卒論は渡辺先生からの「ケプラー研究を当分このまま続けるように」との強い勧めを断って「ガリレオ、ケプラーからニュートンへと古典力学が完成されるに至る内的必然性と外的社会的要請の関連」を卒論のテーマとした。結果としてこの卒論は『科学史研究』に載ることなく闇に消え去ったが、自分としては後悔するところが何もなかった。むしろ自分の調べたいことを自分のやり方でやりきったという満足感があった。・・・（中略）　（『「教師」とは何か』第３部序章３「誰のための研究テーマか？ p.143）

つまり「業績をつくるための研究」「研究のための研究」ではなく、「自分の内的要求」にしたがって「現場教師が最も解決を必要としているテーマ」を選ぶ－これがその後の私の基本姿勢になったのである。　（『同上』第３部序章４「英語教師を選ぶ」p.143）

この文章が、今の寺島先生の原点なのではないかと思いました。自分が「できない英語教師」の一員であり、色んな事に迷ったり、考えたりする中で、「本当にこれをやって良いのだろうか。でも、生徒の実態から見ると、これをした方が良さそうだし、かといって、色んな先生方からクレームが入って怖くてできないかも。」などと思うことがしょっちゅうあるので、寺島先生がこうやって、自分の「**内的要求**」に従うと言われている言葉にとても勇気づけられました。

しかも、「**むしろ自分の調べたいことを自分のやり方でやりきったという満足感があった**」と書いておられることに、「あぁ、私と一緒だ。」ととても強く思いました。人間はどういう時に生きがいを感じるのかということを最近よく考えます。身近な欲にとらわれていたり、周りの人間関係に縛られていたりして本当に自分が満足する感覚そのものを私たちは時々、忘れがちになってしまっているのではないかなと思います。

私は、仕事で、生徒のためにできたり、困難を解決して自分が役立つ仕事ができたときに、心から満足というか、安心して帰宅できるかなと思います。

そして、寺島先生はいつも自分で選ぶテーマを一番下のものと、一番上のものをつかむために選ばれていると思います。ですから、きっと、一番困っている人を必ず助けているのだと分かりました。そのおかげで、私も今、すごく救われているんだなと実感しています。教師の心の持ち様で、救われる人が何人もいるのであれば、それはすごいことだと思います。

また、今「多文化共生」についても少し関わっているので、「多様性」とは何かということをよく考えさせられています。他の人との違いを見つけることや自分が他の人とは違うということは、時にとても不快感を人に与えます。だから、これを簡単に人にはお勧めできないのですが、(特に、きちんとしたい人たちには)そういう違いを飲み込んでうまくやっていく方法を考えることは、時に楽し

くもあり、難しいけど、少しでも何か達成できると、とても楽しくなることもあるのではないでしょうか。少なくとも、私はとても楽しいです。（腹が立つことも多々ありますが。）

１．２　疑問点

寺田先生も書かれているように、もちろん、研究のために必要なところがあれば、そちらをやることも、大切なことだと思います。ですが、私にはそれはたいしたことには思えません。人間性をなくすより、生きがいをもって仕事をした方がむしろ効率的だと思うからです。

私が疑問に思うのは、どうして、こんなに若い時分に、このような高い理想を持つことができたかです。寺島先生の生い立ちを読むにつけても、色々と考えさせられることがあり、そういった中でこの理想を持たれたのかなと感じています。でも高い理想は維持することがなかなか難しいと思います。それをどうやって克服してきたのか、とても疑問に思います。いくつかヒントは本の中にあるとは感じましたが。私も、心が折れることは数知れません。その秘訣を知りたいです。

２　引用その②

もう１つ、印象に残ったのが、

２．１　引用

子供がなぜ無気力になっていくか、無気力になっている子供が好奇心を回復するのはどういう時か、が分かりやすく且つレベルを落とさず述べられているからである。この本を読むと教師自身が知らず知らずのうちにいかに生徒を無力感に陥れているかを知って愕然とするかも知れない。（『同上』第３部５章１「討論の二重方式」p.174）

これは、『知的好奇心』（波田野誼余夫、稲垣佳世子）の同一著者が書いた、『無気力の心理学』（中公新書）の本の薦めです。『知的好奇心』は読みましたが、『無気力の心理学』はまだ読んでいません。早く買って読みたいです。

私が先に書いた、どのように生きがいを持つかという問いの続きなのですが、生徒にやる気がおきないときに、どうしたらそれを持たせることができるのかが今の日本人たちの課題だと思うからです。東濃高校は本当に勉強の苦手な生徒が集まっています。ですが、中学時代ほとんど勉強をしてこなかった生徒が、あの手この手で、段々課題などをやってくるようになっています。

ただ、彼らは、淡々と作業をこなすだけで、頭に何も入れていないと感じる時があります。それはただの苦行にすぎません。ですから、どうしたら彼らに勉強に興味を持たせるかということがとても重要だと思うし、自分がまだできていないと感じる分野だと思うからです。ですから、これをとても調べてみたいという思いにかられました。

「管理」が厳しいと、生徒は自己を出せなくなる。「個性」を重視しすぎると荒れるという学校の中での矛盾で、教師はどの程度「管理」し、どの程度「個性」を認めるのかという難しい舵取りが必要になってきます。けれども、なるべく「管理」の度合いを低め、それぞれの力を伸ばすべき時でもあります。ここで、学校内のチームワークができていないと大変になると思います。

その中で、部活を重視する先生、勉強を重視する先生、しつけをして欲しいという先生方がいて、それこそ、人って多様だなと思うときでもあります。私がやはり重視するのが、言葉です。腹が立つとすぐに手がでてしまう生徒に、まず、口で勝つことを教えたり、口でダメなら行動で示す、ということを教えたり、するには、まずそこから入らないと、どんな活動でも何もうまくいかないと思うか

らです。まず、自分を表現できたり、人の意見を聞いて、それに反論しても良いということが補償されない限り、生徒は口を開かないでしょう。また、教師を信用もしないでしょう。

現在も自分のクラスでは繰り広げられていますが、教師を試すことや、自分の意見をとにかく言うことはできます。ですが、悪い生徒たちの真似を外国籍生徒がしている(水掛け論)くらいのもので、本当に骨のある「論理的な意見」はお目にかかることが少ないです。どうしたら、自分たちの生活が良くなるかとか、そこまで本気には考えていないということです。自分さえ良ければいいというレベルであるということと、教師を信じていいのか分からない不安がそうさせるのだと思います。

３～５歳までの教育と、CALP(学業に必要な言語運用能力)が極端に低いレベルの生徒たちが、今後どうやって社会を渡っていけば良いのか。彼ら自身が一番不安に思っていることは間違いないです。私たちはそれにどうやってアプローチしていけばいいのでしょうか。

そして、外国籍の生徒たちに言えるこですが、この時期の教育の欠如が、その後どれほどの混乱と悲劇を引き起こすのか、認識できる大人を育てていく必要があると感じます。

２．２　疑問点

寺島先生は、生徒が悪いとは絶対言いません。それは、教育そのものが現状が以前より良くなっていくことを目指すものであるからだと思います。ですが、生徒が認識できずに、悪のりしていった場合、時に生徒を怒鳴ることもあると思います。それを例えば、「先生が暴言を吐いた」などと言われ続ける場合に私たちはどうしたらいいのでしょうか。